

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録（2014.12）平成25年度:71-74.

手術を受ける小児の保護者同伴の効果の分析－親の役割遂行状況に着目して－

柴田 祐希, 大野澤 萌, 金子 玉枝, 平田 哲, 本間 敦

手術を受ける小児の保護者同伴の効果の分析 －親の役割遂行状況に着目して－

旭川医科大学病院手術部 ○柴田 祐希、大野澤 萌、金子 玉枝、平田 哲、本間 敦

【はじめに】

保護者同伴入室は、児と保護者に安心感をもたらすという報告がある一方、母子にとってトラウマになる可能性や不安が高まるという報告もあり、当院では積極的に導入できていない。

しかし小児が安全・安楽に手術を受けるために同伴入室が必要な場合、保護者が役割を最大限に発揮し遂行できる看護介入が重要と考え、本研究では、同伴入室時の親の役割遂行状況を明らかにし、保護者への手術室看護師の看護介入を検討した。

【方法】

全身麻酔下手術を受ける1～6歳の未就学児とその親を対象に、入室から麻酔導入時について術後1～2日目に面接を実施しその内容を分析した。

【結果・考察】

研究対象者は同伴入室希望の親子12組。親の多くは、児の傍に居て親としての役割を果たしたい、不安で可哀想という思いを持ちつつ同伴入室を経験していた。術後の面接では親としての役割を果たせたと感じた親と、そうでない親がおり、両者の親の役割遂行状況は、役割克服状態と役割距離状態であった。

同伴入室を勧めていく上で必要な看護介入は、親の特性を考慮し、親が考える役割を看護師が把握して、遂行できる役割に近づけるようにする援助や遂行した役割を認める援助であった。

手術を受ける小児の 保護者同伴の効果の分析 — 親の役割遂行状況に着目して —

旭川医科大学病院 手術部ナースステーション

○ 柴田 祐希・大野澤 萌・金子 玉枝
本間 敦・平田 哲

I. はじめに

小児が手術という危機をうまく乗り越えられるように看護するためには、親を看護することが鍵

⇒小児が安全・安楽に手術を受けるために保護者が
同伴入室時に役割を最大限に発揮し遂行できる
看護介入が重要

II. 目的

手術室同伴入室を希望する保護者を対象に、保護者同伴入室を実施し、親の役割遂行状況を明らかにし保護者に対する手術室看護師の看護介入の示唆を得る

III. 用語の定義

役割行動

人間の何らかの役割に基づく行動。本研究では、親の役割に基づく行動を示し、役割を遂行することに対して抱く感情や態度を表出的行動、役割を遂行することに関わる身体活動を道具的行動と示す。

IV. 研究方法

1. 研究対象

全身麻酔下手術を受ける1～6歳の未就学児とその親(ただしヘルニア根治術は、対象から除く)であり、期間内に行われる小児の手術12件

2. データ分析方法

術前訪問時、同伴入室中の観察、術後訪問時の面接で得られたデータを経験としてとらえ、役割理論を用いながら親の役割遂行状況を【術前訪問時】・【入室中】・【術後に同伴入室を振り返って】の3場面に分けて分析する。

V. 倫理的配慮

A病院の倫理委員会で承認後、術前訪問時に研究趣旨を説明し、個人情報本研究以外で使用しないこと、研究後は破棄することを説明する。個人が特定されないこと、研究への不参加・中断によって不利益を被らないことを保証する。

IV. 結果

研究の承諾が得られた親子12組
(母親が11組、両親が1組)

【術前訪問時】

道具的行動

表出的行動

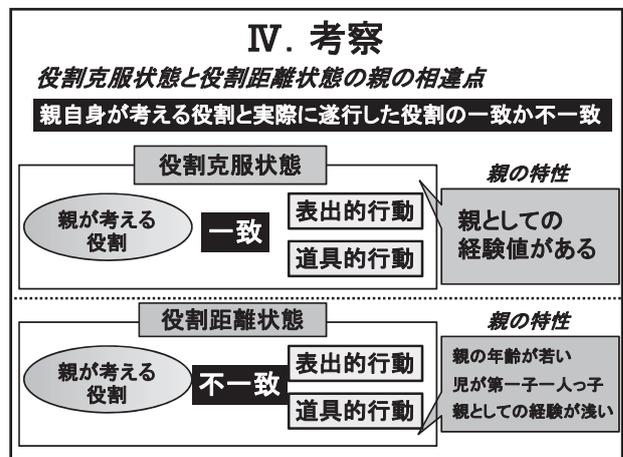
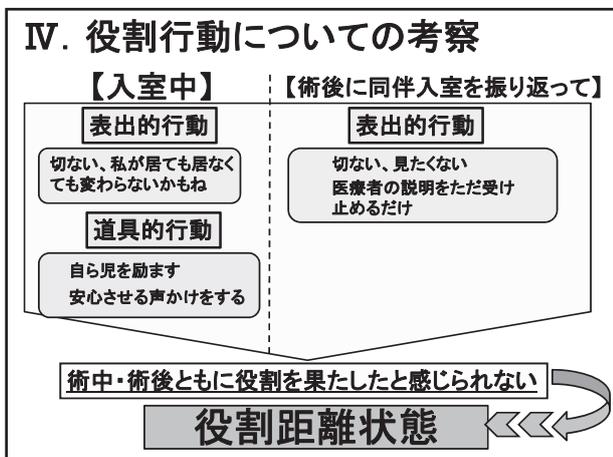
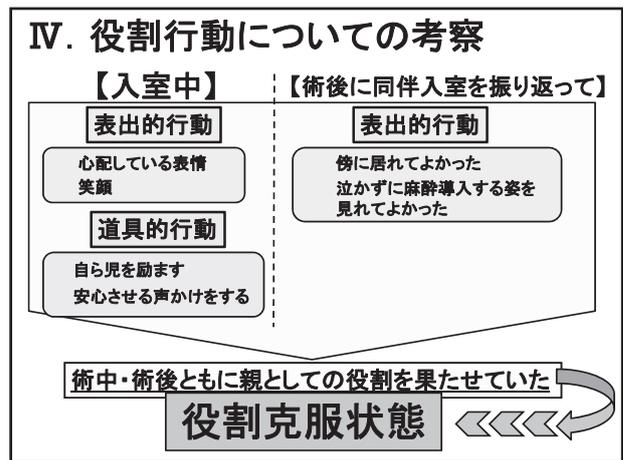
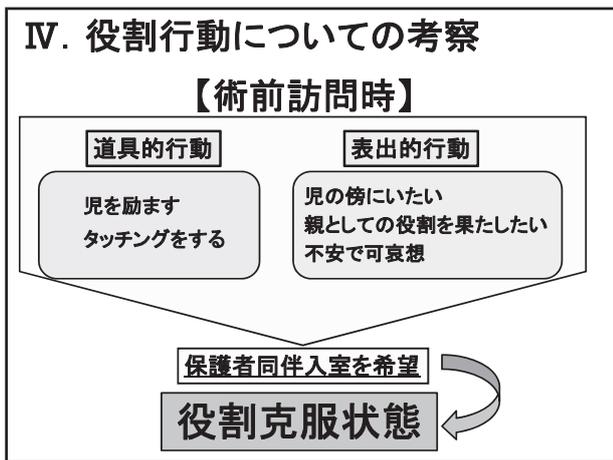
児を励ます	傍にいて安心させたい	必ずしも安全だとは言いきれない不安
タッチングをする	児を見守りたい	親が手術未経験のため不安で可哀想
	児が手術する環境を知っておきたい	

【入室中】

道具的行動	表出的行動
自ら児を励ます	心配している表情
安心させる声かけをする	笑顔
	切ない
	私が居ても居なくてもかわらないかもね

【術後に同伴入室を振り返って】

表出的行動
傍に居られてよかった
見守ることができてよかった
泣かずに麻酔導入する姿を見れてよかった
切ない
児を見守るしかない
医療者の説明をただ受け止めるだけ



同伴入室を勧めていく上で必要な看護介入

親の特性を考慮し

- ・親が考える役割を看護師が把握する
- ・手術室内での親役割が遂行できるよう援助
- ・遂行した役割を認める援助

VI. 結論

1. 手術室に同伴入室した親の役割遂行状況は役割克服状態と役割距離状態であった。
2. 同伴入室を勧めていく上で必要な看護介入は親の特性を考慮し、親が考える役割を看護師が把握して、手術室内での親役割が遂行できるよう援助することや遂行した役割を認める援助である。